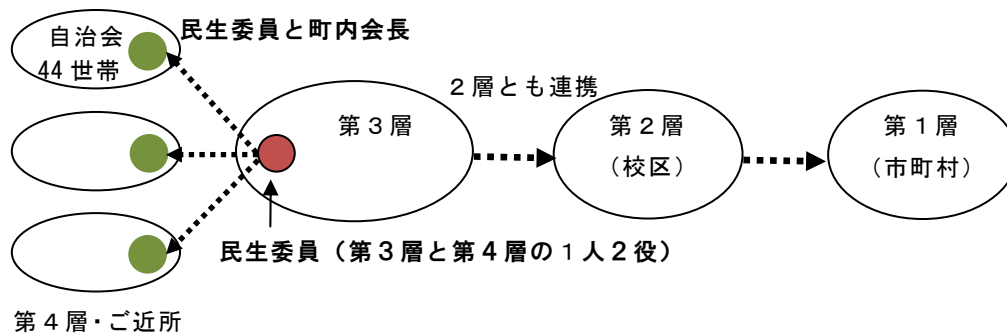


これが「ご近所福祉」だ!

たった44世帯の自治会 民生委員と町内会長が手を組めば



■ 民生委員が特別級の世話焼きさんだった

まず推進体制。上の図を見ていただきたい。普通は第3層が自治会、つまり町内会のある圏域だが、ここでは第4層のご近所が町内会でもある。44世帯というから、私共が推奨する「助け合いがやり易い」範囲である。一般的に言って、ご近所のデメリットは、ここに制度的な組織、例えば町内会などが置かれていないために、主体的に住民の手で福祉活動をする機運が醸成されにくい。ところがここに町内会があるのだから、町内会長と一丸になって福祉を推進することは、やりやすい。

次いで人材であるが、このご近所に在住の民生委員が、特別級の大型世話焼きさんで、他の3つの地区を担当しながら、このご近所福祉を町内会長とタッグを組んで進めている。

新しい町内会長が誕生し、活動が始まったのが、わずか1年半前。この間に、次に紹介されている通りの活動ができています。

①【カーブミラーを設置】

事故の多い交差点にカーブミラーを設置

②【防災倉庫の設置】

③【いきいき百歳体操の町内実施】

町内にいきいき百歳体操の会場がなく、地区外の体操会場まで行ける人のみが体操に参加していた。これを町内で実施。

④【どぶ掃除】

高齢者が多く、側溝のふたを上げてのどぶ掃除の負担が大きい。会員の高校生、大学生に掃除の協力を依頼。

■ご近所は人材の宝庫だった

資源の活用が極めて上手で、ほとんどの場合、この小さなご近所内から掘り起こしている。

- ・カーブミラーの設置では、町内の警察勤務の人に設置許可の手続きと設置を協力してもらった。
- ・防災倉庫の設置では、町内で使える土地がないため、住民の敷地を利用させてもらった。市への届け出書類の作成は町内の土地家屋調査士をしていた方に依頼。具体的な防災倉庫の設置では、町内の元大工に依頼した。
- ・いきいき百歳体操の普及では、町内の一人暮らし高齢者の方に自宅を体操会場に使わせてもらえるようお願い。
- ・ドブ掃除では、高校生、大学生に対してのお礼として、炊き出しをすることになり、会場として町内会員の駐車場を借りることができた。

次に注目されるのは、個人宅を活用しているという点である。44世帯では、社会的な施設はほぼない。あるのは個人宅ばかりだが、その個人宅を活用すればいろいろなことができるということがわかる。

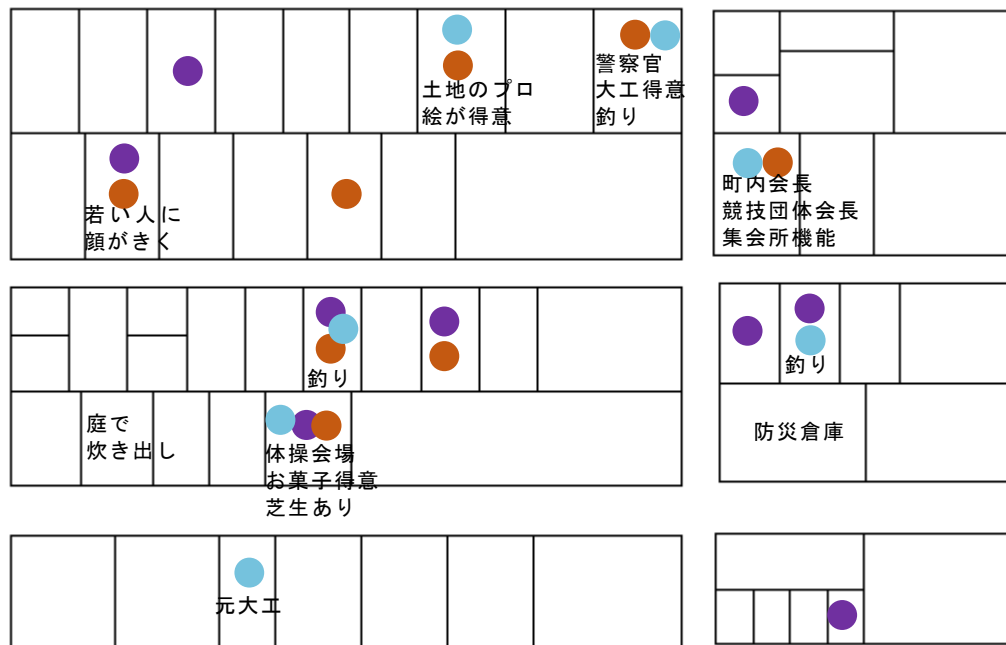
会合は、町内会長宅で行われているし、いきいき百歳体操も会員宅で開かれるし、防災倉庫も住民の敷地を使用させてもらっている。炊き出しの会場も会員宅の駐車場を借りている。

これからの取り組み課題だが、子どもがいる世帯が9世帯あり、幼児と小学生で15人になることがわかったことから、子ども関連の福祉活動も今後の課題の一つとなった。

①いきいき百歳体操の会場で、お菓子作りのイベントを開いたり、②庭を開放したイベントができないか、③子ども会をこの町内単位でできないか。④絵が得意な人や大工などがいるので、絵画教室や木工教室などを開いて、子どもの能力開発ができないか、など。

⑤要介護者などで地域の集まりなどに参加するのが難しい人の家に「押しかけサロン」をひらいたらどうか。

⑥介護経験者のセルフヘルプグループづくりはどうか。介護経験者の中に現役もいる。OBも含めてグループを町内圏域で作ればという案も。



限りなくご近所に近づく これが住民流の「アウトリーチ」

■第1層に腰を据えたままでアウトリーチか？

地域福祉関係者がよく使う言葉に「アウトリーチ」がある。できる限り当事者の方へ近づこうということか。しかし現実はどうなっているか。

今福祉関係者はほとんど第1層の福祉センター辺りにいて、そこでニーズ調査をし、そこから推測してサービスを作り、住民にやってもらう場合は人材を養成し、組織を作り、活動してもらう。当事者については、このサービスを受けたい場合はセンターまで来てください、ということだ。

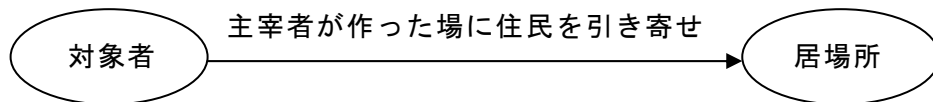
■住民までが第一層に出かけている

ここから校区（第2層）ぐらいまで足を運び、住民懇談会を開いたりして、これがアウトリーチとされている。今の福祉はもともと担い手主導で効率を重視してつくられているから、福祉をやり易い第1層から、もっと下の層まで出かけるという仕組みにはなっていないのだ。

■本物のアウトリーチへの「段階」がみえた

先日、長野市で開かれた地域福祉推進セミナーで、いくつかの活動グループの発表を聞いてコメントをすることになった。その時、ある発表をヒントに、関係者がアウトリーチを実施する場合にどのように発展させることができるのか、1つの流れが見えてきた。

<第1段階>



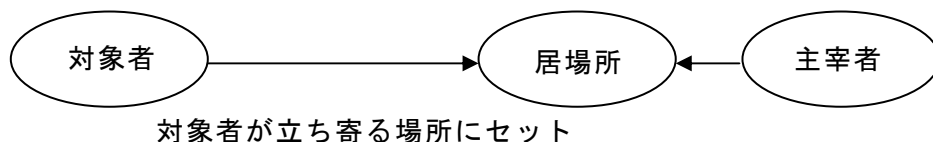
一般的には、主宰者がこうと定めた場所に相手を引き寄せるという方法。これが出発点だ。大抵の活動グループはこの方法を取っている。

(1)住民が多数立ち寄っている場に居場所づくり

発表したのは、高齢者が気軽に立ち寄れそうな居場所づくりのグループ。

その「居場所」をどこに定めたかという点、スーパーマーケットであった。「人を集める」から「人が集まった場」に居場所づくりをすることになったというわけだ。図で示すと以下のようなになる。

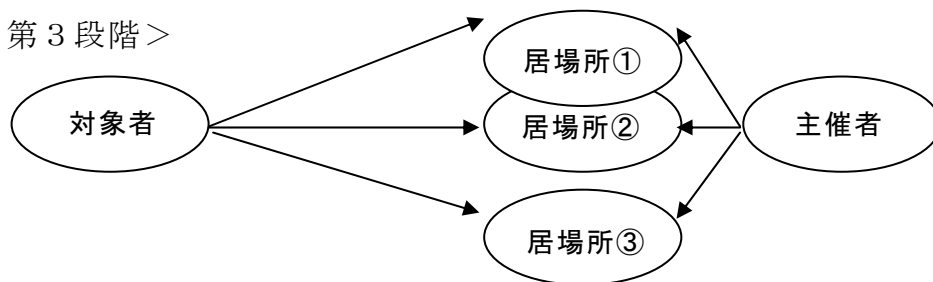
<第2段階>



(2)対象者が集まる所に次々と居場所づくり

とは言え、対象者が集まる場所、出かける場所はスーパーマーケットだけではない。としたら、スーパーに限定せず、人が集まりそうな場を次々と「居場所」にしてしまおうという方法だ。これが第3段階。

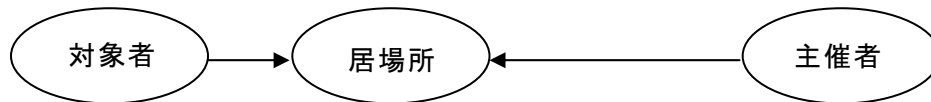
<第3段階>



(3)対象者の方へ近づいていく

次の段階は、自分たちの根拠地から離れて、もっと対象者の方へ近寄っていくこと。できれば第3層（自治区）まで。

<第4段階>

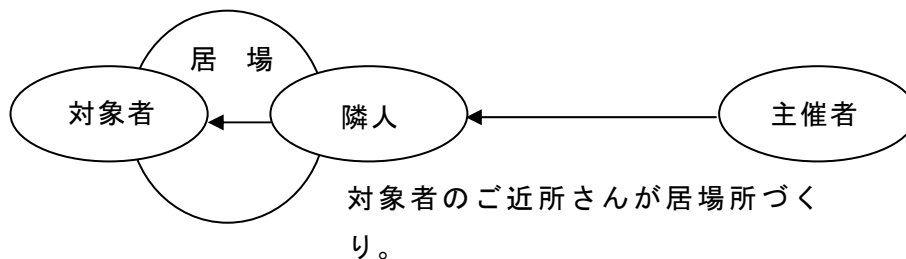


(4)対象者のご近所まで出かける

その次の段階は対象者のご近所まで出かける。その場合は、何も主宰者たちがその居場所を仕切る必要はない。むしろご近所さんたちの手で行われるような支援をすればいい。

もう一つは、対象者が主体的にそういう居場所を作り、運営していくように支援するというあり方。つまり当人と隣人が一体となつての居場所づくりである。

<第5段階>



アウトリーチを発展させていくと、このように、①限りなくご近所へ近づくとともに、②対象者と担い手が一体となっていく。そして③ご近所の人たちの手で仕切られるのではないか。最終的に④当事者が主体的に実施することになる。

婦唱夫随の地域デビュー 家事分担も怠りなく

◆「もう私に何かあっても、この人は大丈夫」

夫の定年退職は、妻にとって、夫婦の時間が増える楽しい日々の始まり—とばかりもいかないのが現実である。所沢市に暮らす佐藤重松さん（70歳）が退職した時、妻の良子さん（70歳）は、やっぱり悩んでいた。「お父さん、これから何したいの？」と聞くと、返ってきたのは「しばらくはボーっとしていたいな」という答え。地域活動への参加を勧めても、重松さんは「俺はいいよ」と言って家にいるので、食事も三食きちんと作らなければならないが、家事を分担してくれそうな気配もない。定年退職後の夫婦像といえ、これが普通だろう。



だが5年後の現在、佐藤家の日常は大きく変わっていた。重松さんはいろいろな活動に忙しく参加し、地域に自分のネットワークができた。それだけではない。驚くことに、家では週2回の夕食当番をこなし、ゴミ出しをし、ハタキを握って掃除にも参加し、買い物も一緒に行く。ときどき気がついた時には洗濯物を干したりたたんだり、食器の片付けもやるよう努力している。いざやるとなれば、食事は彩りまで考え、洗濯物は良子さん以上にきっちりたたむというのが、いかにも男性らしい。良子さんは今、「もう私に何かあっても、この人は大丈夫だ」と思えるまでになった。

◆コツは「私も一緒に行くから」

地域デビューのコツについて聞くと、良子さんは「私も一緒に行くから」と、とにかく連れ出してしまうことだという。男性たちは、何かをしようという気持はちゃんと持っているのだが、その年齢になって慣れない地域に入っていくのは気が重い。とにかく「はじめの一步」が問題なのだ。

二人が最初に一緒に行ったのは、シルバー人材センターだった。「『俺はいいよ…』と言いながら、強引に一緒についてこられて。仕方がないから『まあ、ちょっと時間が潰せばいいや』と登録したら、すぐに仕事 came ちゃった」という重松さん。この活動が、結局、5年以上続いている。

続いて、学習センターと体操教室にも良子さんが一緒に行き、体操教室は夫婦で申し込んだ。幸い、人と交流するのは苦手ではなく、マメなタイプの重松さんは、その後は放っておいても交流が広がっていった。

◆健康や情操教育まで

地域デビューだけでなく、料理や掃除など、良子さんが重松さんの「自立」に強くこだわり、「どうせ無理」とあきらめることなく導いてきたのには、理由がある。虚弱体質で病気が多く、しょっちゅう病院通いをしている良子さんは、「先を考えれば、順番としては自分が先に逝くはずだ」と思っているのだ。

今、いちばん身につけてほしいと思っているのが健康への意識だ。また、パソコンに向かってばかりでなく、たまには庭の緑などにも目を向けてもらおうと働きかけてもいるが、これは花の美しさを一緒に楽しみたいというだけでなく、重松さんが1人になった時に、四季の移り変わりや植物の生命力が「生きる力」にもなるのではないかと思うからだ。

お二人のやりとりを聞いていると、これは絶え間ない協同作業なのだ、と思う。日々「うるさいなあ」とこぼし、葛藤しながらも、努力して良子さんに協力し続けている重松さん。そして日々「うるさいなあ」と言われながら、むしろ放っておくほうが楽なのに、夫婦の今後のために重松さんに関わり続ける良子さん。二人がこれまで積み重ねてきた協同作業の成果が重松さんの今であり、それは今後も続いていくのだ。

対内活動と対外活動

地域のすべての組織に二種類の活動のチャンス

■「地域の担い手養成研修」でグループ作業を試みたら

このほど、さいたま市社会福祉協議会の依頼で、今までにない新しい形の「福祉参加」推進セミナーを開催した。その柱が、次頁に示した図を生かしてのグループ作業である。まずこの図の意味するところを解説しよう。

この図は2つの円で成り立っている。1つは10個の小さな円。ご覧の通り、私たちが地域で所属している組織で、家庭に始まって、ご近所、町内会、趣味グループ、職場、ボランティアグループ。子どもは学校や子ども会、祖父母は老人クラブ、主婦は生協・JA。

もう一方の大きな円は、地域社会。小さな円が大きな円の一部重なっている。重なっている所が、それぞれの組織と社会との接点だ。

この図に2つの地域活動の機会がある。1つがその重なっている所での活動。もう1つは重なっていない部分での、身内向けの活動だ。

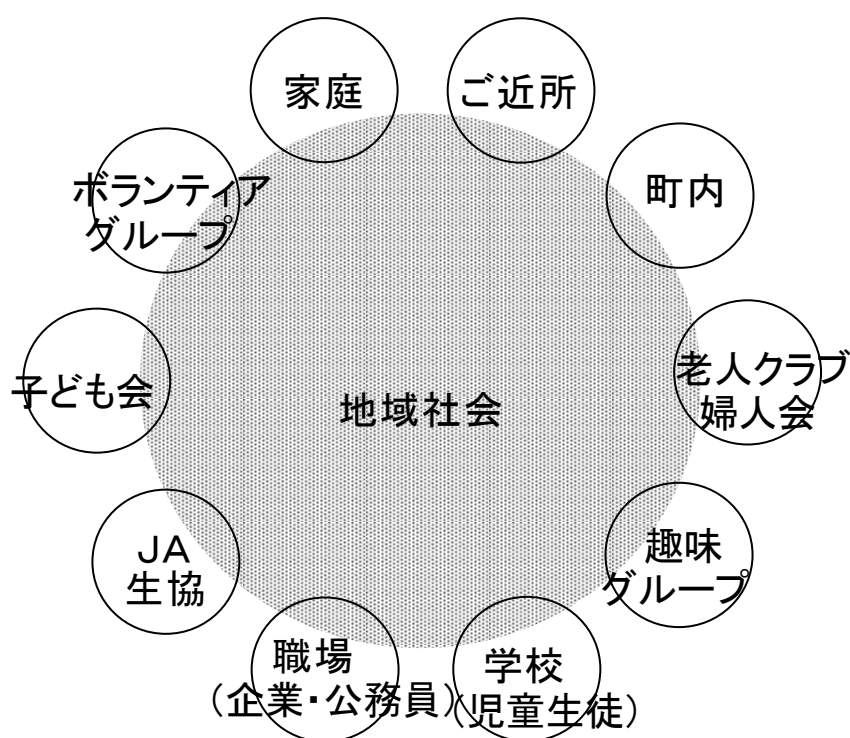
■足元に活動のチャンスがあるのに

私たちは何か地域活動をしようという時、こういう構図を考えず、ボランティアセンター等の活動推進機関にテーマを探しに行く。しかし本来はまずこの2つの活動機

会を探すことから始めるべきではないか。どの組織に所属していても、対外活動と対内活動のテーマが必ずあるはずなのだ。

この2つの活動を優先する意義は何か。例えば対外活動だが、組織としての活動の中で、地域の福祉ニーズが近づいてくる。その接点で活動すればいいのだから取り組みやすいし、相手も助かる。また対内活動の場合は、自分が所属している組織のメンバーに福祉課題を抱えた人がいる。その人に関わるのは、ごく自然なあり方ではないか。

そこでグループ作業では、この図の小さな円に記入欄を設け、できそうな活動を考えて発表してもらった。主なものを拾ってみると…



① 家庭

対内活動では、「家事の分担」。夫の妻への活動の原点はこれだ。それと「社会活動に出られるようにお互いに協力する」というのもなかなかいい。

② ご近所

「救急車の同乗」というのは、そういう活動をした体験がある人なのかもしれない。「子どもの泣き声に注意 (虐待の早期発見)」も、難しいが大事なご近所活動である。

③町内会

「ご近所の人を誘う」というのは、町内会のイベントにということか。こういうことも立派な地域活動だと広く知ってもらう必要がある。

「ゴミ出しルールの検討」。マップづくりをしていると、それぞれのご近所のゴミ出しのあり方に問題があるケースが多い。

④老人クラブ・婦人会

「独居高齢者の支援」がただの地域活動なら、それだけのことだが、同じ仲間の中にいる独居高齢者の支援をするとすると、身内向けの活動として意味が出てくる。

同じように、「共働き世帯の支援」が同じ婦人会仲間を対象にするのなら、これまた大いに意味が出てくる。

⑤趣味グループ

「グループ参加者間で見守り」。これが実践できれば、いい対内活動になる。「男性の参加を呼びかける」という案もあるが、これ自体、立派な活動だ。

⑥学校・児童生徒

「いじめの内部告発の教育」。クラス内でいじめが起きても、誰も何もしない。これこそが問題ではないか。せめて足元でいじめが起きたら内部告発できるようにしなければならない。

⑦職場（企業・公務員）

「勤務交代を申し出る」。おそらく仲間のために手を挙げるということだろうが、そういう身内相手の活動がもっと広がっていい。

⑧ボランティアグループ

「仲間を助ける」というのがある。そういうことが今のボランティアグループではできているだろうか。

どれだけ引けましたか？

福祉の線

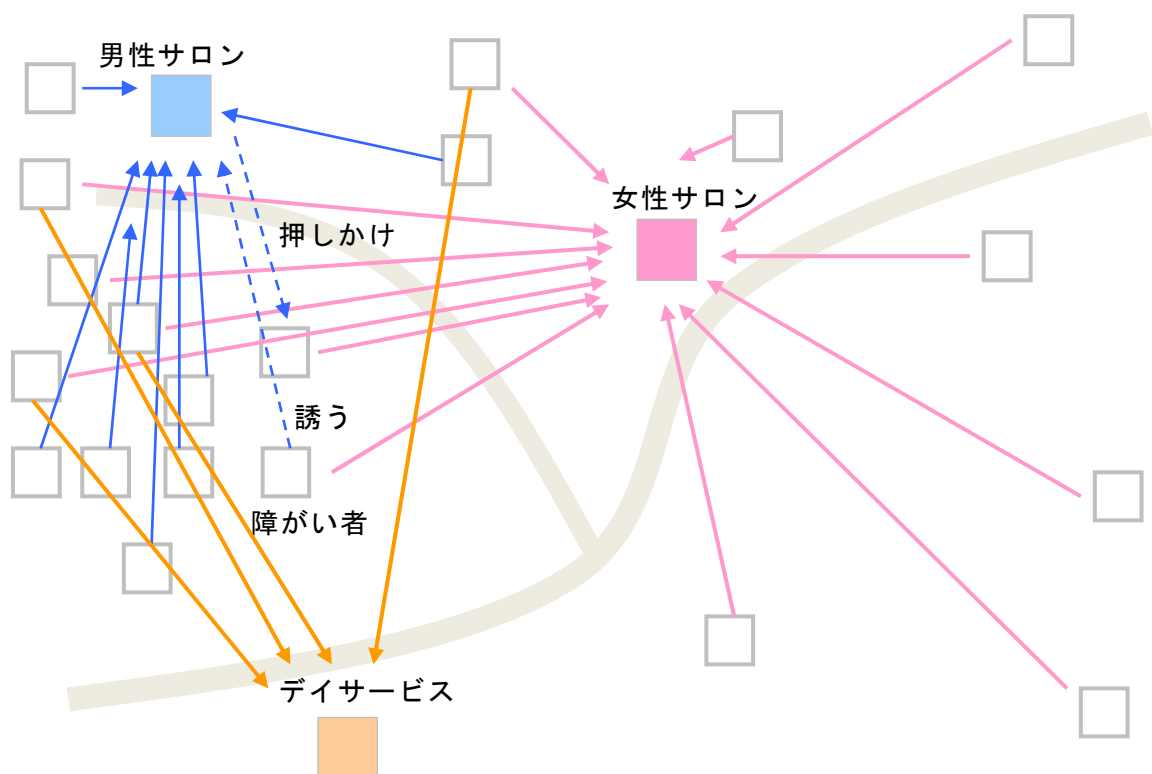
■たくさん線が引ければいいのか？

支え合いマップづくりの最も重要なのは、住民のふれあいや助け合いの営みを、線で結んでいくことである。それはいいのだが、実際にそういう関係の線を引いてもらうと、それこそ、むやみやたらに線が引かれていって、マップは線だらけとなる場合もある。

■公民館に向けてたくさんの線が引けても…

初心者が作ったマップを見て、一体どういう線を引いているのかを点検すると、最も多いのが「ふれあいサロン」に参加する、あるいはカラオケの会に参加する、ラジオ体操に参加する、趣味の会に参加するといったものだ。そういう集まりは、大抵はご近所の近くの公民館や公会堂で開かれているから、その公会堂へ向けて、ご近所内の多くの家からそこへ向かって線が引ける。

ではそれらの線が、福祉的に見てどういう意味があるのかと考えると、率直に言って、それほど評価すべきものとは言えない。



■では、「意味のある線」とは？

先日、宮崎県小林市で住民と一緒に作ったのが、ここで紹介するマップである。ここではどういう「関わり合いの線」が引けただろうか。この中で意味のある線はどれだろうか。

■男女別々にふれあいサロン

マップの中の2つの場に線が集中している。真ん中が女性を中心としたふれあいサロン。左上では、この男性宅に男性が集まっている。カラオケのセットもあるが、中心は飲み会ということらしい。ある男性宅の離れを使ってやっている。女性と男性が別々に開いているのも面白い。

■サロンに参加させてもいい人がいる

ところで、この男性向けのサロンに、もっと来ていい男性はいないのかと調べると、2人いた。

①要介護の男性宅へ「押しかけサロン」はいかが？

1人は要介護の男性。主催者の男性も含めて、彼をサロンに誘おうという考えは持っていなかった。この人を誘うことはできまいかと聞いたら、「体力的にちょっと無理かな」という。ならば、その家に「押しかけサロン」を開きにいったらどうかと言ったら「それは無理」という言い方はしなかった。

②身障者をサロンへ誘ってみたら？

もう1人は、身体障害者の男性。彼については、「誘えば来るかもしれない」という話が出た。「いや」ではないということらしい。これが第二の「福祉の線」だ。

③農業を引退したばかりの人に異変が多い

前述の要介護の男性について、農業を引退してから気力がなくなったという話が出た。「それならこの人もそう」と名前があがった男性は、やはり農業を引退してから異変が見られ、認知症の疑いが出始めているという。「農業を引退した時が危険」という、重要な問題が出てきた。

認知症の疑いが出てきた男性は、両方のサロンに参加している。両方のサロンで見守られているのだから、この2本の線も福祉的な意味があるわけだ。

④デイ利用者も全員受け入れるサロン

女性のサロンで意味があると思われるのは、このご近所でデイサービスを利用している人はすべてこの女性サロンに受け入れられていた点だ。こういうサロンは、私が

全国でマップづくりをしていて、初めて発見した。そういう話をしても、女性たちは別段珍しいことをしているわけではないといった顔をしていた。

このサロンの特徴は、体操、歌、踊り、旅行など、様々なお楽しみをしている点だろう。そこに要支援の人も受け入れているのだから、これ自体、介護予防効果が見込める。立派な福祉である。サロンの日には誰かが相乗りをさせてあげているらしい。送迎もやっていたのだ。